

ら、澎湃たる世界文化大轉換の大浪に乗つた、此時こそ多年の宿望、願業、念願等の達成せらるべき「今正是其時」であつて、竟に學院は昇格の目的を果し、中學校は認可中學に、祖山學院は祖山専門學校にと堂々と昇格したのである。何と愉快なことではないか「實に必要は機會を生む」走筆一言を写せん、聖代に生れ合はせた光榮に感謝報恩の玄題を高唱して祝意を表する次第である。南無妙法蓮華經。

宗立學校の教育理念

求道園主 宮澤英心

私は今でこそ日蓮教團を脱して、超宗派的の立場から單獨の活動をしてはゐるが、元來が私の生家は日蓮宗であり、實に又十數年間は、日蓮宗寺院で佛飯を頂いた者であるから、教團外にゐるとは言へ、宗祖の御厚恩を忘れてはゐない。たと祖師の聖教を如何にして傳へるかに對し、一般僧侶とはその方法を異にするに過ぎない。宗門人の一部からは、今なほ私を異端者と見做し、或は謗

法罪の者といふ人もあるらしいが、然し私自身の心境から言へば、これで祖師の御意に反しないものと信じてゐる。僧籍だけが日蓮宗に屬し、形式だけが日蓮宗の法規にかなひ、口に立派なお説教をされても、肝腎な信と行とが反日蓮主義的であつては、何うかと思はれる節もある。猶また昭和維新の今日に、若し日蓮上人が再現せられたとせば、恐らく既存の教義信條に大修正を加へられて、宗門の改革を遊ばさるのでないかと思ふ。私はかうした觀點において、自分の現在なせる事業は、直接宗門のお役には立つてゐないが、幾分の恩返は出来てゐるやうに思つてゐる。

なほ私は毎月「身延教報」や「法華誌」を頂いでゐるから、之を通じて宗門の動靜を知り、その益々興隆しつゝあることを、内心ひそかに喜んでゐる一人である。殊に宗門の人材をつくる祖山學院が、このたび専門學校に昇格さるゝに至つたことは、日蓮教團に取りて、此上ない慶事と存じてゐる。法は人に依りて貴く、また法はひとり弘まるものでない。何と言ふても、法の宣布には人材を要する。法華經は三千年の歴史を有するが、それが時に榮え、時に衰へたのは、全く能弘の人にあつたことは、史實の明かに征する所である。

二

由來、日蓮宗は傳統的に法自慢の弊があつて、宣傳方法には至極まづい所があつた。諸經中王最爲第一と自惚れ反つてゐる間に、あとの鳥が先きになるといふ失敗があつた。宗教の救済機能は、固より法の内容にも因るが實際問題となると、寧ろ人の方に根本を置くべきだと思ふ。例へば、佛教が必ずしも、釋尊の獨創でなかつたに拘らず、當時の宗教界を風靡したのは、あの偉大なる釋尊の人格力にあつたのである。猶これをほかの宗教に徴しても、同様のことが言ひ得られる。日蓮教團の發展興隆は、一に聖僧の出現に俟たねばならぬ。この意味において、祖山學院が昇格したことは、正法弘布の上に甚大なる意義がある。幸ひこれを契機として、多くの人材が造り出されるならば、祖師の御悦びは固より、皇國日本の爲にもまた祝福すべき事である。

三

就ては茲に一つ私の希望を述べたい。それは他でもないが、學院が大學に昇格しようと、専門學校に昇格しようと、それで能化たるの資格が備はるものでなく、本當の資格は、院生それ自身の修行にあると云ふ點である。學科の上では、よし優秀の成績で卒業しても、信と行と

の上に缺くる所あれば、それは能化たるの資格はないのである。各宗の宗立大學から、毎年幾千の僧徒が卒業してゐるが、一體この多數の僧侶諸君は、卒業後よく能化たるの使命を果してゐるか。たと學解の一般を修めたといふに停まり、ほんとに民衆を濟度するの迫力を持つてゐない。即ち宗教家としての信念と、人格とを備へてゐる者は、まことに稀有なやうである。

それでは智識の分量より見て、世間の大學に優れてゐるか云ふに、これ又はなほだ劣つてゐる。失禮な申し分であるが、智徳いづれの點より見るも、決して優秀だとは言へない。茲において吾々の望む所は、よし智識の上には劣るとしても、徳行の點においては、斷然、群を越えた特色を持ち、世人の追従を許さぬ所があつて欲しいのである。昔は「坊さんと醫者とは物知り」と言はれたものだが、今はもうそれが當らない事になつた。故に僧侶として唯一つ殘されてゐるものは、世人の及ばぬ徳行を把持し、これを以て民衆に精神的感化を興へる點にあると思ふ。社會も亦それを切に待望してゐる。近ごろ佛教界に人物なしといふ言葉を聞くが、然しこれは必ずしも、學者が無いといふことを意味しない。現に佛教學者は、各宗とも相當にゐる。要するに、人物なしとの

聲は解行一致の徳僧、信念の人がゐないと云ふ事であらう。

山鹿素行先生は「教は化を以て終る」と言つてゐるが、教育は智を以てなし得るも、感化は徳を以てせねばならぬ。自分に徳なく、自分に信なくして、人に感化を興へることは、絶對に不可能である。宗立學校が世間の一般學校と異なるところは、この徳行ゆたかな人物を造るといふ點に、教育理念の根本を置かねばならぬと思ふ。宗立専門學校といふその専門とは、學解の修得よりも、徳行の練成を主とする意味に解したのである。私は専門の宗乘や、布教の技術を輕視する者でないが、然しそれ等は第二義に屬するもので、基本は何と言ふても、僧侶自らの行と信とにある。猶また佛弟子たるの信念に堅きものは、智識の吸收にも亦怠らない筈である。即ちそれは止むに止まれぬ信念が、自然と學問に向つても、後退を許さないからである。

四

私は本年六月四、五の兩日、京都本圀寺布教院講習會に招かれて、四時間ほど拙い講演をした。演題は「私の體験を語る」であつたが、前日は主として二十數年間の體験、および今日に至る経路を述べ、翌日は遺教經の三

慧より説き起し、衣座室の三規、五綱判の運用、新体制下の宗教問題、これ等について、私一個の見解を述べたが、此のうち私の最も主力を注いだことは、布教師自らの菩提心と、律行の重大性とに就てであつた。「上求菩提下化衆生」といふ言葉は、僧侶の常套語になつてゐる。では口にいふが如く、眞にみづから菩提を求めてゐるかと云ふに、正直なところ、人に付ては要求してゐながら自分にはさつぱり求めてゐない。自らが泥みに足を入れてゐて、人に足を洗へよと教へも、相手は空吹く風のごとく感ずるであらう。煩惱未解の者は、到底、人をよく救ひ得るものではない。

祖師は「日蓮に今生の祈りなし、只佛にならんと思ふ計りなり」と宣ひてある。自分がまづ佛にならう、人よりも自分が肝腎だと、この求道心に燃えてゐる時は、よし完全な佛にはなり得ずとも、必ず人を感化し得るものである。「教育者は自分を教育してゐる間のみ人を教育し得る力がある」と言つた人もある。教育者がこれを忘れると、教育は機械的になる。師範學校の學生は、先生になる事ばかり習つて、自分が生徒になることを教はつてゐないから、教育學の技巧は出來上つても、人間の師たる本當の資格は備はらない。私は今日の一般僧侶たちに

訊ねたい。「あなた方は一度でも自分が佛になつて見たいと考へられた事がありませんか」と。多くの方は、この一大事を忘れてゐるのではあるまいか。甚だ失禮な言ひ分であるが、私にはさう思へて仕方がないのである。

僧侶としての最も恐しい危険性は、僧職を商賣化する事であり、職業視する事である。法を賣物とし、信者を得意先とするに至つては、もう宗教の生命は亡びたものと見てよい。この頃は寂が一つもなくて、どうも閑で困るなどと、平氣で言ふ者のあるは、僧侶の職業化したことを、露骨に物語つて居るのである。人生の最大悲惨事たる死に對し、これ待つてゐるやうな淺ましい心は、道念あるものゝ夢にも考へられない事である。職業化すると、こんな事も平氣で言へるのだ。布教といふ事も亦これと同様、説教屋、講演屋になつて了つては、感化力はゼロにならう。假令ゼロにならない迄も、半減するに間違はない。現代は金儲を主眼とする商賣でさへ、物資配給の機關として、御奉公するだと云ふ、道徳理念に修正されつゝある。況んや、もと／＼超功利を要旨とする宗教に於ては、職業化することは大禁物である。

五

一たい今日の社會は、僧侶に何を求めて居るのであら

うか。私を以て卒直に言はしむれば、學者、辯舌家、才能家ではなく、僧侶らしい僧侶であらう。無論これも不要といふのではない。然し世人が一番望んでゐるのは、徳行堅固な聖僧、僧侶らしき僧侶である。古への諺に「僧にして僧臭あるは眞僧に非ず」といふ言葉がある。又、禪語には「悟りの悟り臭きは上悟に非ず」ともあるなるほど、眞僧の域に達した者は、僧らしき臭味のぬけ切つたものであらう。或は一休禪師風の人物が、眞僧なのかも知れない。然し他面より之を考へて見れば「僧にして僧臭なきも亦これ眞僧に非ず」と、抗辯の必要もありはせぬかと思ふ。今は僧臭のぬけ切つた者どころか、僧臭のある者さへ甚だ稀有なのである。

近來、僧侶の律行は著しく衰へ、俗人となら異なる所はないといふ聲は、至る所で聞かされる非難である。元政上人や、本妙律師の様な律行の人を、今の世に求めることは、求めること自體がすでに間違つてゐよう。この點は私もよく承知してゐるのであるが、現代の佛敎界を眺めたとき、僧臭ある僧侶のあまりに少きを思へば、律行の重要性を強調せざるを得ない。前にも言へる如く、法は萬古不朽の大道であるが、これが人を救ふ力となるのは、律行堅固なる聖僧の敎化にある。僧侶はたとへ世

間的の學識は劣り、地位は低くとも、凡俗の眞似のでき人格、即ち徳操に優れた所あれば、必ず民衆はそれに吸ひつけられるのである。

大學、又は専門學校などの教授は姑らく別とし、一般僧侶が民衆の尊敬の的となるは、その僧侶が何を多く知れるかに非ず、彼は何を行つてゐるか、如何に戒律を守つてゐるかにある。律行は像法時代のこと、末法はそんなことに拘はる必要はないと、遁辭を使ふ者もあるが私はこの辯護には共鳴が出来ない者である。何れの時代何れの國に於ても、僧侶が無戒破戒であつていゝと云ふ理由は、絶対に許されない事である。末法が濁世であり無戒の時代であるならば、僧侶は更に一そう有戒であらねばならない。

白鳥の恩をば黒鳥に報すべし。聖僧の恩をば

凡僧に報ふべし。(祈禱鈔)

との祖訓をば、自分勝手なところに引合に出して、無戒を毫も恥とせざるが如きは、日蓮教徒を名乗るの資格なき者である。

六

後年、日本佛教の母胎となつた叡山の開基最澄法師は二十歳を越えたばかりの青年時代、人跡たえた比叡山中

において、研學と修禪とに苦練の行を積まれたが、その時の發願には次のやうな悲痛なる文句がある。

生けるとき善をなさずんば、死する日、獄の薪とならん。得難くして移り易きは、それ人身なり。發し難くして忘れ易きは、これ善心なり。

伏して己が行迹を尋ね思ふに、無戒にして竊に四事

(衣食、臥具、湯藥)の勞りを受け、愚痴にして亦四生の怨となれり。

と、自己に鋭い批判を加へられて、おのが醜い心事を慚愧してゐられる。なほ最澄法師は利他の願行については結文の所で、

伏して願くば、解脱の味、獨り飲まず、安樂の果、獨り證せず、法界の衆生と同じく妙覺に登り、法界の衆生と同じく妙味を服せん。若しこの願力に依つて、六根相似の位に至り、若し之神通を得ん時、必ず自度を取らず、正位を證せず、一切に著せざらん。

願くば、必ず今生の無作無縁の四弘誓願に引導せられて、周ねく法界を旋り、遍く六道に入り、佛國土を淨め衆生を成就し、未來際を盡して、恒に佛事を作さん。

と、切々たる信念を披瀝されてゐる。而もこれが二十歳の一青年僧であつたことを思ふとき、私共は實に羞恥に

堪へざるものがある。日蓮上人が傳教大師を三國四師の一人に教へられ、又この信念に感奮せられたのも、蓋し當然の事である。更にまた大師が弘仁九年五月、嵯峨天皇に奏上し奉つた山家學生式には、僧侶の資格を國寶、國師國用の三種に分類して、次の如く説明してゐられる。

國寶とは何物ぞ。寶とは道心なり、道心ある人を名づけて國寶と爲す。故に古人の曰く、徑寸十枚、是れ國寶に非ず。一隅を照らす、此れ則ち國寶なりと。古哲又曰く、能く言ひて行ふこと能はざるは國師なり。能く行つて言ふこと能はざるは國用なり。能く行ひ能く言ふは國寶なり。三品の内、唯言ふこと能はず、行ふこと能はざるは國賊と爲す。

と、即ち大師の理想とした國寶的人材とは、私がさきに言へる上求菩提下他衆生の大道に生きる菩薩的な人物である。祖山學院が専門學校に昇格するに至つたことには延山當局の苦勞も並大抵でなかつたらうと察する。この聖勞を深謝すると共に、私はこの専門學校より、幾多の國寶的聖僧の出現を望んでやまない、宗祖示して宜はく本より學文し候ひし事は佛教をきはめ佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、佛にはなり候らめ（佐渡御

勘氣鈔）

行學の二道をはげみ候べし。行學たへなば佛法あるべからず。我もいたし、人をも教化し候へ。行學は信心よりをこるべく候（諸法實相鈔）

追憶

唐津 法蓮寺 藤山 英憐

祖山學院が昇格しましたことは爲宗爲山何共慶賀の至りに存じます。私は明治三十三年から同三十七年迄學院で學ばして貰つた老衲でありますが、私の入學の時は本間僧正を大先生として富木堯廣上人が起信論や華嚴の五教章、貫名本壽上人が俱舍論、後藤照善上人が唯識論、脇本觀靜上人が眞言の十卷章、小山圓泰上人が祖書と申す様な擔當で、日日の講書が仲々盛でありました。又毎週土曜日は質問會に充てられ、能所互に忌憚なく甲論乙駁眞劍な法戦が交され、それが酣になつてから最後に本間僧正の裁決を仰いで幕を閉ずると云ふ有様でした。先の宗門の教學部長の湯川僧正など、當時二十五才位の青年僧で學院では年若き方でしたが、一度論陣を張ると仲々義を枉げず、上級生も先生方も其鋭鋒の突撃に容易に